棒ダー・オブライフ

喚く狂人

初日

性交経験 :31

「あんっ、はっ、あぁっ、んっ、はぁ、あっあっ、あぁん」

上等な布団の上に寝そべった女が、腰をくねらせている。その上に覆い被さった若者は、自らの逸物でもってひたすらに女を抉っている。肉と肉とがぶつかる破裂するような軽い音と、蜜に濡れた肉がこね回される耳に残る音が、室内を満たしている。

二人は秘め事の真っ最中だった。しかし、それはただの秘め事ではなかった。

女は名前を西行寺幽々子といった。ここ白玉楼の主だ。この行為を普通でないものだといえる理由は、一糸まとわぬ彼女の肉体の、この世ならざる美しさにある。

整ったという言葉では足りない、大和撫子そのもののような柔和な顔立ちが目を引く。ぎらぎらと目立つけばけばしい美しさではなく、群衆の中にあっても自然と目を引かれる類の美しさだ。上気した頬に紅が差し、わずかに汗ばんできらきらと光を反射する額には、ふんわりとした髪が張り付いている。瞳は性交の快楽に揺れ、艶めく唇からは己の受けている性感を端的に示す声がこぼれ落ちる。

飾らない雅さを象徴するような顔がそのような艶やかな表情を浮かべる様には、世間のあらゆる男の神経をかきむしってやまないものがある。だが、それだけではない。彼女の肉体もまた、目を見張るほどのものだった。

女――子をなし生む性別という概念を、具体化したような肉体だった。柔和な首の曲線

は、伸びやかな鎖骨の稜線へと行き当たる。鎖骨はそのまま、なだらかな肩へと向かう。
掌に余るほど豊かな乳房は、それだけのサイズを誇りながらも垂れることなく形を保ち、動きに合わせてどこまでも柔らかに揺れている。僅かに色を濃くした先端は硬く尖って、ぷっくり膨れている。目立つ位置にあるだけあって、はしたなさは二倍にも三倍にもなる。
そこには、誘蛾灯のように男を捕らえて放さない、視覚的なフェロモンとでも呼ぶべき訴求力があった。それでいて、下品だという印象を与えず、むしろ、見る者に感嘆の溜息をつかせるほどの優雅さを備えてすらいた。
乳房からさらに下へ向かうと、わずかにくびれた腰と、白くなだらかな腹が目に入る。そのどちらも全くわざとらしくなく、自然で、周囲と完璧に調和している。その調和は、自然信仰における御神体の扱いを受けてもおかしくないほどだった。
そして下腹部。男女を分かつ部位に奥ゆかしく生えそろった茂みはよく整えられており、日本庭園を彷彿とさせる。幻想郷一と評される白玉楼の庭木ですらも、これには及ぶまい。その茂みに守られる秘むべき裂け目は、密やかにぴっちりと閉じて――は、いなかった。それどころか、いままでのおしとやかさはなんだったんだと言いたくなるほど、淫らな様を晒していた。ひどく硬く膨れあがった肉棒をぱっくりと口を開けて咥え、突き込まれるたびにはしたない蜜をまき散らしながら、抽送の快楽を一身に受け止めていた。その内側

では、無数の襞が肉幹に絡みついて愛撫しながら、一方で張り出したエラによって激しく捲り返されているに違いなかった。

おしとやかさと淫らさの絶妙な両立が、そこにあったのだ。

「はぁッ、あは、んっ、そうよ、もっと突きなさい、ほらっ、できるでしょう?」

そんな彼女を抱いているのは、彼女を抱くに値する、絵に描いたような好青年だった。身体もよく鍛えてあり、それでいて無駄にマッチョになることなく、男が見てもほれぼれするような肉体美がそこにあった。

彼は間違いなく幸せ者だ。世間一般の人間が一生かけて稼いだ金を積んでも指一本すら触れられないような女を、抱いているのだから。にもかかわらず、その表情は、身に余る幸せを著していなかった。それどころか、憔悴しているようですらあった。

その理由は、二人の結合部にあった。肉貝からは、抽送のたびに白いものが滴り落ちている。愛液と精液の混ざった、この世で最も淫らな汁だ。彼はもう既に、何度と射精しているのだ。どんな上等な料理でも腹一杯以上食うのは苦痛であるように、幽々子のような最高の女を抱けるとあっても、身体の限界を超えて交わっていれば、苦しくもなってくる。

「は、ふぅん、ん……はっ、あっ」

「ッああっ、すみません、西行寺様、もう射精ます、うッ、ううッ」

「もう？　……はぁ。分かったわ、中に頂戴」
そんな状況であっても、流石にこれほどの肉体と交わっているだけあって、青年の腰は止まりはしなかった。しかしやはり、限界は来る。射精が近いのだ。
絶頂。性行為の終点にして頂点。そこにいたろうというのに、幽々子は不満気であった。露骨に溜息をついてみせる。実際、まだ満足していなかった。こうも一人でイかれては、まったくもって楽しくない。
「うッ、ううッ、ううううッ！」
「はッ……あはっ」
やがて、青年が一番奥に一物を突き入れる。子宮の入り口あたりで、その精を解き放つ。中で感じる熱に、幽々子は熱く甘い吐息を零す。しかし、やはり不十分だった。放たれる精は薄く、男の力強さというものを味わうには足りない。
量にも不満が残る。びゅく、びゅ、といった程度で、ペニスの脈動は収まってしまった。まさにあっという間だった。何度も射精しているのだからそうなって当然ではあろうが、彼女を満足させるには到底足りていない。
「ッはー、はー、はぁっ……はぁ」
「もうお終い？　私としては、もっと付き合ってほしいのだけど」

「すみません、もう無理です……」
この程度で限界とは、根性のないことだった。とはいえ、これ以上は実際無理だろう。見るからにぐったりとして、コトをはじめる前よりげっそりしている。この青年は借り物だから、あまり無理をさせて死なせてしまってもいけない。
「いいわ、下がりなさい」
「は、はい」
欲望を吐き出しきり、すっかり萎びてしまったモノが、膣穴から引き抜かれる。余韻もなにも、あったものではなかった。青年はふらふらと立ち上がると、服をひっかけ、老人のようなおぼつかない足取りで部屋を後にした。
「はーぁ」
素晴らしいセックスの後でなら心地よい疲労感に包まれるものだが、今はただ、倦怠感しかなかった。精神の方も、満足感でなく徒労感というか、むなしさに満ちていた。
また、満足できなかった。長い溜息を吐く。
どうにも最近、欲求不満だった。といっても、男日照りというわけではない。むしろ、セックスは十分すぎるほどしている。紫に頼めば、彼女のコレクションの男をいくらでも貸してくれるからだ。

問題は、なんというか――ただのセックスしかしていないということだろう。もちろん、自分は不感症ではなく、ただのセックスでもそれなりに快楽は得られる。だが、それでは満足できない。素晴らしいセックスでなくては駄目なのだ。刺激が足りない。

刺激というのは、退屈を嫌う精神にとっての、ある種の糧である。精神主体の生物たる妖怪にとって、食事よりも重要なものといって過言ではない。

刺激は未知のこと、経験の浅いことから得られる。これが、彼女を含む人外にとって、大きな問題となる。長寿である妖怪は必然的に多くのことを何度も経験することになる。したがって、知的に未開拓な領域がどんどんと少なくなっていくのだ。

今の幽々子がまさに、性行為においてそのジレンマに陥っていた。ただのセックスとはいうが、流石に八雲紫が伽のためにコレクションしている男、相手としては申し分ない。申し分ないはずなのだが、誰も彼も、自分を満足はさせてくれなかった。どんな美男子に抱かれ、素敵な言葉を囁かれ、時に優しく、時に激しく責め立てられたとしても、駄目だ。どうしても、ただのセックスに成り下がってしまう。

大好きなはずの行為が、今の彼女にとっては退屈きわまりなかった。

「アレももう、駄目ね」

さっき相手していた彼にしてもそうだ。好みの顔で教養もあって話上手、よく気がつき

床の技術も十分。貸してもらった当初は、かなり良い物件に思えた。が、やっぱり駄目だ。三日も持たずにマンネリになって、一週間経った今ではすっかり飽きてしまった。

紫がきたら返して、新しいのを貸してもらおう。そう思っていた矢先だ。

「はぁい幽々子、ご機嫌はいかが？」

ちょうど彼女の真向かい、何もない中空に、ぱっくりと裂け目が開く。中から女が顔をのぞかせた。異様な光景だが、動じない。いつものことだからだ。

八雲紫はそのまま隙間を広げ、隙間から上半身を乗り出した。彼女もまたこちらと同様、生まれたままの姿だった。軽く運動――こちらがつい先ほどまでしていたのと同種のもの――をしてきたのだろう、その肌はしっとりと汗ばんでいた。

類は友を呼ぶというべきか、彼女の身体もまた、幽々子同様、目を見張るほどに美しい。だが、志向するところは正反対だ。幽々子の肉体をあるがままの美しさ、あるいは自然の極地と位置づけるなら、紫のそれは美を追究する営みの地平線に存在しているかのようだ。無数の計算式によって弾き出された寸分違わぬボディラインは、見る者全ての網膜に一瞬で焼き付き、それ以外見えなくしてしまうような暴力性すら秘めている。

幽々子と紫。これほど美しい二人の女が並んでいるのは、それだけで歴史に残る絵画の題材となりうる光景だといえる。まして、二人の肌がほんのりと上気し、性行為の余韻を

意味する官能の蜜がその秘貝から滴っているともなれば。
「貸したげたあのコの具合はどう？　悪くないでしょう」
「あー、それなんだけどね。やっぱりちょっと違うみたい。別の子、貸してくれない？」
「ハァっ？」
信じられない、何言ってんの――そういう考えを思い切り含んだ声だった。顔も、そう言っていた。
「ちょっと、アレは私のコレクションの中でも相当のお気に入りなのよ？　本来なら他の女に貸して変な癖がつくような真似なんてしたくないのよ？　それを、他ならぬあなたの頼みだからって曲げてるのに、いやその前に、まだ貸して一週間と経ってないじゃない。ホントあの、ほんっともう、信じらんないホント」
「うん、それは感謝してるんだけどね、でもやっぱり違うのよね。刺激が足りなくて退屈。そうね、今度は外国人なんていいかもね、筋肉もりもりで巨根の黒人なんていない？」
いたって真面目に言っているのだが、紫は呆れたと言わんばかりに頭を抱えてみせた。
「手のかかる娘ね……。まあいいわ。今日はあなたのその退屈について話をしにきたの。黒人もコレクションにいるけど、それより、あなたのその退屈を紛らわしてくれるような人を連れてきてるの、今日は」

退屈を紛らわす。その言葉に、実のところ幽々子はさほど期待していなかった。何人も貸してもらって言うことではないが、彼女がとっておきと言って連れてくる男は、揃いも揃って美男子だ。代わり映えがしない。悪くはないが、刺激を得るには不適切だった。

「私のコレクションってわけじゃないんだけど、ちょっと外で知り合ひぃっ⁉　あ、ちょ、待って早乙女さん、今はちょッ、おっ、ひっ、はぁぁッ」

突如、紫は身体を震わせた。何事かと疑うこちらをよそに、彼女は隙間に上半身を預け、喚きながら、がくがくと震え始める。

隙間の向こうから、水音が聞こえてきた。くちょぐちょりくちょぐちょと、肉を激しくこね回す音が響いてくる。隙間の向こうで、何者かが、紫の肉体を貪っている。おそらく、早乙女さんと呼ばれた者がだ。

「ひっ、あ、ちょっと待って、そんな、幽々子の目の前で――はぁあんッ！」

しばしそのように悶えていた紫だが、様子が変わった。やや抵抗する様子を見せた後、一際大きな声を上げた。何が起きているのか、誰が見ても明らかだ。セックスしている。隙間の向こう、こちらから見えない空間で、男の一物と女の狭穴とが結合しているのだ。

「はひっ！　ひぃいっ、おっ、ほっ、ひぃッ、はひぃ、あへ、へぇっ、おっ！　ほっおっ、おひぃ、はーっ、はーっ、ちょい待っ、幽々子助けっ、ひぃいっ！」

そのヨガりかたは、いつもの紫とはまるで違っていた。彼女は、どちらかといえば男に対して優位をとり、女王のように振る舞うのを好んでいたはずだ。ところが今の彼女は、だらしない雌の顔をさらしながら、激しい抽送によるものか身体を前後させ、そのたびに普段の理知的な声色からは想像のつかないような嬌声をあげている。

「あぁっ……」

幽々子はその様に、見入っていた。完璧の権化とでもいうべき美しさを誇る八雲紫が、あのような下品な様を見せている。……いや、確かにその事実も大きなものではあるが、そうなる原因の方がはるかに重要だった。

あの紫ですら取り繕うことも出来ず狂ってしまう快楽が、そこに存在している。一体、どれほど素晴らしいセックスに巻き込まれたら、そんなことになってしまうというのか。あれこそきっと、自分が求めているものに違いなかった。

うらやましさと興奮から、自然と手が股座へと伸びる。子種にまみれねっとりと汚れた裂け目に指が滑り込み、掻き回していく。熱い溜息が、唇の間からこぼれ落ちる。

「ちょっぉ、幽々子ぉっ、あひっ、見てないでっ、ああぁッ、助けへぇひッ！　ああ！」

助けろと言うその声すら嬌声に飲まれ、どんどんと男に、ペニスに媚びたものになる。隙間の向こうから聞こえる水音、肉のぶつかる音も、ますます激しくなっていく。

これが他の女であれば、別にどうとも思わなかっただろう。だが、今乱れているのは、肉棒に屈服しているのは、他ならぬ八雲紫だ。閨の相手に対して自分と同じくらい厳しい審美眼をもつ女だ。そんな彼女をあんな風にまでしてしまえる男というのは、一体どんな輩なのか。早乙女という名字、そして紫の趣味から考えるに、優男風の美男子だろうか。いずれにせよ、彼に抱かれたら、自分もきっと、ああなってしまえるに違いない。それを考えるだけで、幽々子の指の動きも、腰のくねりも、どんどん激しくなっていくのだった。

「ひぃ、来るッ、きちゃぅうッ、あへっ、たすけっ、イクイクイクッあッ、藍ッ、幽々子、へひ、あひっ、助けッああッ！　クるッ、あぁぁイくッ、いやぁイクイクイクぅうううああああああああああああーッ！」

紫の瞳が見開かれ、背筋は反り返り、白い喉からはその身に余る快楽を受けていることを意味する声がまき散らされる。反り返った肉体はやがて痙攣を始める。なにか危険な病にでもかかったかのようだったが、もちろん違う。絶頂したのだ。

「あぁぁぁぁッ、射精てるぅう、プリップリのザーメンッ、子宮あつひっ、あひッ、オッ、おほォッ、おっおっ、ひぃあぁああッ」

そして、隙間の向こうの誰かもまた、絶頂を迎えたようだった。精子は当然のように、膣内に吐き出されたらしい。ペニスが脈動しているのだろうタイミングに合わせて、紫の

身体がびくびくと跳ねる。

抽送すらあれほどすさまじい反応を引き出したのだから、膣内射精――性行為の終点にして最も気持ちよい瞬間ともなれば、まさに狂ってしまうほどの快楽があるに違いない。現に今の紫は、いつもの妖怪の賢者としての態度をかなぐり捨てて、いや、かなぐり捨てさせられていた。間抜けですらある声を部屋中に響かせ、子種を注がれる悦楽にただただ身悶えしている。その顔は、やはり賢者のそれではなくなっていた。肉棒にもたらされる快楽に屈服した、一匹の雌の顔だ。

「はぁぁッ……！」

それを肴に、幽々子もまた、己を慰める行為の終着点へ至った。快楽の波が彼女を包む。

自慰というのは結局は性交の代替行為に過ぎず、得られる快楽もまがい物なりのものでしかないとばかり思っていた。だがそれは間違いだったようだ。幽々子は今、礼の青年と交わったときよりも大きな快楽に酔いしれていた。素晴らしいセックスを肴に行う自慰のもたらす快感は、つまらないただのセックスがもたらすそれよりもずっと上質だった。

「へひぃ、はぁーっ、はぁッ、あひ、あは、チンポ、おちんぽぉ」

射精は随分長く続いた。紫はその間、品性のない声をあげて悶え続けていた。ようやく終わるころには、彼女の表情は女としての悦びに充ち満ちていた。たった今種付けされた

ばかりなのだと、事情を知らぬ者が見ても分かるような表情だった。
その後、たっぷり一分ほどかけて呼吸を整えた紫は、ようやく本題に入った。
「ッひぃ、はぁ、はぁッ……はひ、ちょ、ちょっと、トラブルがあったけれど……幽々子、紹介するわ、これがあなたに会わせたかった人達よ、早乙女さんと、権田原さん」
中空に浮かんだままだった隙間が、床まで開かれる。紫はよろめきながらも、向こう側から歩き出てきた。やはり何も身につけていない。そして、収穫前の小麦畑のような金色の野原のすぐそば、八雲紫のもっとも大事な場所は、ねっとりした白い汁とねばつく透明な蜜とでぐちゃぐちゃのどろどろになっていた。性交、それも激しき性交があったことの、なによりの証拠である。見ているだけで、また昂ぶってしまいそうだった。
いや、今はそんなことよりも、だ。早乙女と権田原。二人の男達のことが気になった。気になるどころの騒ぎではない。初恋の人が訪れるのを待ちわびる乙女じみたときめきが、今の幽々子の胸を占めていた。
いったいどんな男達なのだろう。うなるような筋肉の持ち主か、それともすらりとした華奢な身体の持ち主か。性格は？　趣味は、好みは？　――いや、そんなことよりもだ。一体、どんなセックスをするのだろう？　どれほど自分を楽しませてくれるだろう？
「ややっ、本当に別の場所に繋がるとは！　この隙間というのは不思議ですなぁ！」

「おっほ、すごい美人さんだ、幻想郷は美人の里なんだねぇ、ムフフ」
「……えっ」
紫に続いて、男達がその姿をとうとう現した。
片方の男は眼鏡をかけているのだが、サイズが顔の大きさと釣り合っておらず、見るからに不自然な印象を受ける。髪を横流しにしているのは、薄い頭頂を隠すために、心許ない希望を側頭部から一生懸命回した結果なのだろう。笑えるというより、哀れですらある。
もう片方の男はといえば、そんな努力をするための希望すら残されていなかった。頭はほとんどが肌色だ。てっぺん辺りにうっすらと、半端に生え残っているのが、逆に不精さをうかがわせる。垂れ目が贅肉により線と化し、笑っているように見えた。
そしてどちらも、見苦しさに顔をしかめたくなるほど太っていた。頬肉に唇が左右から押されて、アヒルの口のようになっている。余りまくりの顎肉に首は半ば埋もれており、胸も腹も妊婦のように突き出している。手足も肥満の状態で、縮尺を変えれば幼児のそれのようにも見える。
総じて、見ていられない。紫のお気に入りをさっきまで見ていたから、なおさらだ。
「ええ、と」
お手伝いか何かが先に出てきたのだと、幽々子の頭はとっさに判断した。まさかこれが

紫のいうところの会わせたかった人達だとは思えなかった。彼女はこういう男を、排水溝から這い出してきたゴキブリ以上に嫌うはずだった。

「いやぁーどうも初めまして、私が早乙女でございます！　お会いできて光栄ですぞ！」

「僕は権田原です。ムフ、紫さんの親友だって聞いてたけど、やっぱり美人さんの友達は美人さんなんだなぁ、ンフフぅ」

幽々子の考えを打ち砕くように、バーコード頭のビジネス眼鏡が早乙女、禿げ頭の線目が権田原と名乗った。そんなはずないじゃないか――そういう考えを捨て去れない一方で、確かにそうに違いないと納得せずにはいられない要素もあった。

彼らもやはり、服を身につけていなかった。幽々子の視線は、自然と剥き出しの男性器へと向かっていた。それは、彼女が知るペニスとは、全く異なっていた。

彼女の知るペニスというのは、すなわち、紫のコレクションする青少年達が持っているようなペニスのことである。ペニスとは欲望の象徴であり、彼らのペニスは、その健全な欲望――すなわち、女性と愛し合いたいとか、気持ちよくして気持ちよくなりたいとか、そういった真っ当な考えを反映していた。

対して、目の前のこれはどうだろう。今までに見たこともないほど立派だ。エラは深く張り出し、カリは太く、猛々しく反り返っている。しかし、それが秘めるところの欲望は、

驚くほどに醜く歪んでいた。女を屈服させたい、快楽漬けにして、セックス中毒の色狂いにし、求めればいつでも股を開く淫乱な雌豚に堕落させてやりたい――そういう考えが、一目見ただけで伝わってくる。

脳裏に、なめくじがよぎる。彼らのペニスは確かに立派でこそあったが、そういった、汚らしい、日陰にあるべき、嫌悪の対象となるようなものだった。であるにも関わらず、期待せずにはいられなかった。あんなものに穿たれたら、一体どうなってしまうだろう。

あれは毒だ。女を堕落させる毒。だから、受け入れるようなことがあってはならない。それは分かっている。だが、この熱い子宮の疼きが、それを拒むなどとんでもないと強弁してくる――彼女は、抵抗しているつもりだった。だが、既に手遅れだったのだ。彼らの肉棒がもつ毒は、肉穴に受け入れたときにだけ効果を及ぼすような甘いものではなかった。見ただけで駄目だ。彼らの欲望は、視界に入れただけで、女に対して影響を及ぼす。

幽々子もそのことに気づきつつあった。見てはいけないと己を戒めようとする。手遅れとはこのことだ。彼らの欲望は、一度獲物を捕らえたが最後、蟻地獄のように己の側へと引きずりこんで、目的を完遂する。

「はぁぁっ……」

早乙女と呼ばれた男のペニスを見る。粘液にまみれて、ぬらぬらと輝いている。ほんの

数分前、あのペニスが、紫の肉壺を散々に穿っていたのだ。その結果、紫がどうなったか——言うまでもないことだった。彼女がああなるのだから、自分もああなるに違いない。熱い溜息が零れる。もはや、醜い外見のことなどどうでもよくなっていた。ただ、彼らと性交に及びたくて仕方なかった。

「ンッ、あっ、あっあっ」

自然と、指が淫裂へ伸びていく。先ほど絶頂を迎えたばかりの淫裂へ。にゅる、にゅぷと、既に解れに解れきった肉穴は、あっさりと指を咥え込む。だが、足りない。彼らとのまぐわいは、こんなものではないはずだ。

「ややっ、西行寺さんも紫さん同様、色狂いの素質が大いにあるようで、類は友を呼ぶ、という奴ですかな、紫さん？」

「あッ、はぁ、私が色狂いだなんて、そんなことっ」

「そんなことはないとおっしゃる？　ついさっき親友の前でレイプされてイきまくってたマゾ豚はどちらさまですかな？　言ってみろよマンコドロッドロにしやがってよオイ」

こちらの痴態を食い入るように見つめながら、早乙女と名乗る眼鏡は紫を抱き寄せると、その乳房を揉みしだき、淫裂を掻き回し始める。神が一週間のうち最後の一日をまるまる費やし設計したような乳房に指が食い込み、放埒に形を変える。種をたっぷりと植え付け

られたばかりの肉貝が、淫らきわまるねっとりとした音をたてている。
彼女は抵抗しないどころか、自ら身体を開き、されるがままにされていた。その表情は与えられる快楽に蕩けていた。やはりこの男達が、八雲紫をこうまで屈服せしめたのだ。
「ねえねぇ西行寺さん、ンッフ、一人寂しくオナニーなんてしてないで、僕らと楽しもうじゃない。その方が気持ちよくなれるよムフッ、どれどれ西行寺さんのオマンコはうっわなんだこれやっべもうヌレヌレじゃんとんでもない淫乱だな」
権田原と名乗る禿が近づいてくる。間近で見るに醜い男だった。鼻息は荒く豚のようで、広すぎる額に浮かんだ汗は、紫のそれと違って色っぽさなど全くなく、不衛生な印象しか与えてこない。しかし、そんなことは全く関係がなかった。幽々子の目は、いまやペニスに釘付けになっていたのだから。
権田原の指が、彼女の身体へ――女としてもっとも大切な場所に、無遠慮に触れる。蜜を溢れさせる泉を、我が物顔でこね回してくる。嫌悪は感じなかった。むしろ、さらなる快楽への期待が、そして彼への媚が、その胸に湧き上がってきた。
「なんだこれうわっザーメンじゃん、ムフッ、他の男とセックスしてたのかな？　グフっ、さっき中出しセックスしたばっかりなのにもうオナニーしようとしてたわけ？　むふふふ、淫乱の友達はやっぱり淫乱なわけだ」

「アッ、はっ、あぁぁっ、あっあっ、ひぃ」
ぬちゅぬちゅと、弱いところをぽってりとした人差し指の腹で擦られる。甘ったるくも痺れるような快感に、腰が浮いてしまう。こんなに早く弱点を探り当てられたことなど、今まで一度としてなかった。権田原という男、相当手慣れているようだ。
「キスしましょうキス、ムフッ、言っておきますけど強制じゃないですからね、あくまで西行寺さんがしたかったらですよ、オラとっととヤれよチンポハメてやんねぇぞ」
たらこじみた自らの唇を指さしながら、接吻を求めてくる。強制じゃないですからね、と言ってこそいるものの、後半の口調は有無を言わせぬものだった。その思惑は分かる。求めたのはこちらだという事実を作り上げ、今後、要求を通しやすくしようというのだ。隠せてもいないゲスな本性といい、考えが見え透いている——けれど、逆らえない。
「んむふぅっ、ぢゅぷ、くぷぅ」
逆らえるはずもなかった。ペニスの魔力に取り憑かれてしまっていた。大して迷うことすらなく、幽々子は自ら、彼の唇に己の唇をあわせ、さらには舌まで差し込んだ。真夏のゴミ捨て場のような匂いが口内に広がる。外見だけでなく、口臭までひどい。しかし今の彼女には、それが最高のものであるように思えた。
「ふぅむっ、くぷっ、んふぅう」

最愛の恋人が相手であるかのように、熱心に口交をかわしていく。こんな豚以下の輩にこんなことをするなんて、西行寺幽々子も堕ちたものだ――そんな考えが脳裏をよぎる。ただセックスが圧倒的であるというその一点だけを評価し、外見も人格も最低の男相手に身体を開こうとしている。なんということだろうか。だが、その惨めさが、彼女を逆に昂ぶらせた。紫のコレクションはみな人として秀ですぎていて、こんな感覚を覚えさせてはくれなかった。紫もきっと、この感覚にハマったのだ。

「ンーッ、ぐぷっ、ずるっ、フッフッフッ！　んむふぅ」

「ほら紫さん、あっちも盛り上がっていますぞ、我々ももっと盛り上がりましょう、オラ俺のチンポ手で扱け、さっき散々種付けしてやったんだからそれくらいしろっての」

「あぁッ！　はぁっ、あーッ、そこ、ひぃっ、はひっ、オッオッ、ひぃ、熱いっ、チンポ熱い、ひぃい、あっあっ、オマンコ、オマンコ掻き回さないであぁぁッ」

「やや、紫さん、チンポが熱いのは当然のことですぞ、紫さんのような極上美人がお相手となればなおさらのことですぞ。後でまたコイツでそこのお嬢様気取りとまとめてダブルでハメ殺しにしてやるからな覚悟しろよオイ」

唇を重ねているまさにこの瞬間すらも、指は淫裂を躾けようと狭い裂け目の中でくねる。身体が造り替えられていくかのように感じる。普通の愛撫では、普通のセックスでは満足

できない、男に媚び屈服し快楽を請う形でなくてはイけない身体にだ。

こちらの痴態を眺めながら、早乙女も早乙女で紫の肉体を調教し続けている。彼女の膝はがくがくと震え、秘裂は愛の蜜と白濁との混ざった汁をぼたぼたとはしたなくも零している。要求に応じ、朝一番の雪原を思わせるほどに白い指が、一度射精したはずだというのに硬くそそり勃ったままのペニスに絡みつく。それは、最高級のシルクを用いて一流の職人が丹精込めて作り上げたハンカチで酔っ払いのゲロを拭く以上のミスマッチだ。だというのに紫は、むしろ自ら積極的に、ソレを扱きあげていく。表情は、女としての悦びを浮かべている。

――羨ましい。

口づけを交わしながらその様を横目で眺め、幽々子はそのように感じた。羨ましくないはずがなかった。あんなペニスに奉仕させていただけるなど、女として羨望の対象になるに決まっているじゃないか。

「ぶはっ、グフッ、ぐふふっ、キスも手慣れてるねぇ、とんだヤリマン女だ、お前みたいなのは一生チンポ奴隷してるのがお似合いだからな、すぐそうしてやるよ、ホレ」

先に口を離したのは権田原だった。二人の唇の間を、唾液の橋が伝う。ロマンティックと言えなくもないが、相手が禿げた中年では台無しだろう。

彼は己の股間を指さした。相変わらずの威容を誇る肉棒が天を指しながら鎮座している。ホレ、以上のことを言われずとも、何をせよと指図されているか、幽々子には理解できた。つまり、しゃぶれと言っているのだ。

「そんなっ……」

そんなことしたら、狂ってしまう。

本気だった。本気で、そう思った。そう思わずにはいられないペニスだったのだ。下着の中で蒸れていたのか、むわりと漂う熱気。ぐねぐねと這うグロテスクな血管。びきびきと張り出したエラ。どれをとっても、女を引き寄せ雌に叩き落とすために存在しているとしか思えない。それを、咥えろだって？　そんなことをしたら、したら。

「ぐふふっ、なにが『そんなっ……』なのかなぁ？　そんなこと抜かす権利があるとでも思ってるのかな？　ムフッ、さっきから物欲しそうな卑しい目で、ムフフフっ！　チンポガン見してたくせに、どの口がいうってのはこのことでしょ。それともアレかな、チンポが欲しくないとでもいうつもりかなぁ？　それならそれで、別にいいんだけどさ、こっちとしては。西行寺さんがオマンコ濡らしてるから付き合ってあげてるってだけだからさぁ、ングッフフフ！」

「あぁぁっ……」

それでもなお、あくまで付き合ってやっているのだという姿勢を、権田原は崩さない。もっともそれは、相変わらず姿勢だけの話だった。彼は立ち上がり、座ったままの彼女の頬に、勃起した自分自身を押し付けてきた。

文字通り目と鼻の距離に、ペニスがある。それもただのペニスではない。女を屈服させ、食い物にするための凶器だ。赤黒い亀頭に深々と刻まれたカリ首、肉幹が描く凶悪な曲線、そしてなにより、この距離だからこそ感じる、立ち上る強烈な雄の香り。

呼吸してはいけない。そう感じた。この香りはあっという間に、己を虜にしてしまうと。が、吸わずにはいられない。生物として呼吸せずには生きていられないとか、そんなことはほとんど関係がない。それよりも、彼女にも当然宿っている女としての本能が、優秀な雄の存在というものを感じたいといって聞かなかったのだ。

結果、鼻から深呼吸するという、火事の現場で油を浴びるくらい不適切な——本人からすれば、これ以上なく適切な——行動に、彼女は出るのだった。

「あっ」

そうなると、もう駄目だった。神からの啓示のように、言葉が頭を満たした。

しゃぶりたい、しゃぶるべきだ、しゃぶらなくては。

「あむぅうっ、んぐっ、ぢゅるっぢゅぽっ、んっふ、んぢゅっ、ぢゅるぽっ」

強烈な内的動機により、彼女はひどく積極的な行動に出る。大口を開けてペニスを咥えこんだかと思いきや、唇を、頬をすぼめて肉幹に吸い付き、空気の抜ける間抜けな音を立てながらぢゅぼぢゅぼと吸いつき始めたのだ。

――ああっ。

口内に、恐ろしいまでの雄の匂いが、味が、広がっていく。それだけで分かってしまう。自分はこのペニスに絶対に勝てないし、逆らうこともできない。服従する以外の道など、女である以上ありえないのだと。そして、そう悟ってしまったことが、彼女にさらに熱心な口淫を行わせる。どうせ屈服させられる運命なんだから、恥じらったり悪あがきしたりするだけ無駄じゃないかというわけだった。

そこに、白玉楼の主、冥界の管理人としての威厳や誇りなど、あろうはずもなかった。

「おっおおっ、これは、ンッフ、やばいねぇ、すごいやばい、ものすごくやばい。さすが、男を取っ替え引っ替えしてるような淫乱ビッチは技が違うねぇ、ンフフフ！　おらもっと舌使えよ気がきかねぇな、そんなんで男が満足するとでも思ってんのか、こちとらお前がどれだけハメてほしいと思ってるのか口マンでチェックしてんだぞおい、そんなんで誠意伝わると思ってるなら大間違いだからな分かってんのかっつうの」

「んんんくぅ！」

罰だとでもいうように、乳首をきゅうとつねりあげられる。痛みと同時に快楽が襲う。思わずとろけてしまいそうになるが、とろけるわけにはいかない。今の自分は、口奉仕の真っ最中なのだから。

「あぁ――幽々子ばっかり、ずるぅい」

「ははは、手コキの真っ最中になにをおっしゃいますか。だいたいお前よそ様のセックス観察してる余裕がまだありやがるのか、今すぐなくしてやるよオラッ」

「はっヒィッ！　おっおっ、オホォッ、あおぉおおぉおおっ！」

「いやぁ素晴らしい、まるで楽器の演奏のようなヨガリ声ですなぁ！」

早乙女とかいう男の楽しげな声と、紫の悶える声。すぐ側で、親友がおもちゃのように弄ばれている。彼女はそれに、羨ましさを覚えた。今紫は、何をされているのだろうか。同性の自分が見ても羨ましくなる乳房をめちゃくちゃに揉みしだかれているのだろうか、それとも、彼らに躾けられきっているだろう肉穴を、何本もの指でしっちゃかめっちゃかにされているのだろうか。いずれにせよ、自分も早くそのようになりたくて仕方なかった。それは、いうなれば、今にも行き倒れんばかりに飢えた者が、食い倒れんばかりに飽食の限りを尽くしている者を見たときのような心境だった。

「ンンンお口がおろそかになっちゃってるねえ、ダメダメそんなんじゃホラ、フェラチオ

集中しなきゃもっともっと！」
「んふっ、ぐぷぅ、ぢゅるるる、んぷっ」
だがそれは、あまりにも贅沢というものだった。なぜなら彼女は今、その口でペニスを、それもこんな凶悪なペニスを味わうという機会に恵まれているのだから。権田原は、そのことを叱咤したに違いなかった。
集中しなくては。舌で亀頭を舐め回し、カリ首に沿うようにして舌先を這わせていく。頭を前後させ、唇で肉幹を扱きたてるたび、みっしりと繁茂する陰毛が鼻先をくすぐり、そこから立ち上る濃密きわまる雄臭が、嗅覚を、肺を満たしていく。口端から零れた唾液が顎へと伝い、ぬるりとした小川をかたちづくる。
「あーいい、ムフフフッ、いいよお西行寺さん、君いまかなり上等な口便器になれてるよ、グフッ、マンコの方もたっぷり便器にしてやるから覚悟しとけよオイ」
当たり前だが、冥界の管理人で生粋のお嬢様、かつ死に誘う能力まで持ちあわせた彼女に、このようなぞんざいな口をきく輩などいない。けれども彼女は、怒りなどしなかった。というか、そんなことは別にどうでもよかった。彼女はときめいていた。たっぷり便器にしてやる——それはつまり、死ぬほどセックスしてもらえるということに他ならない。
「ムムムムム、紫様があまりに熱心に扱くものだからもう我慢なりませんぞ全くこの雌豚が、

これはハメて差し上げねばなりますまい、おらとっとと寝転がって足開けやこの変態」
「ひぃっ、ひぃ、あへっ、はひ」
「そうそう、それでよろしい。自らマンコをおっ広げるサービス付きとは、さっすが妖怪とやらの賢者気取りをしているだけのことはありますなぁ、そーら今からハメてやるぞー、雌豚マンコにチンポ恵んでやるぞー」
「あぁぁっ、焦らさないでぇっ、早く、早くぅ」
親友が今まさに、美しく完璧である彼女にとって最もふさわしくない形のセックス――男に媚び、屈服し、自ら娼婦のように腰を振ることで行為の継続を懇願する形のセックスに、その身を投じようとしている。それが間違った道であるということを、幽々子は理解していた。親友として止めてやるべきだということも。だが、彼女は動かない。間違った道を進み、それの与えてくる屈辱に身を焦がすことが、今の紫にとってはなによりの悦びなのであると理解していたからだ。――自分にとっても、そうだ。
「んふぅっ、ぢゅるっ、ンッ！　んくっ、んむぷっ、んンフッ！　ンッンッ！」
「うわなんだこいつオナニーおっぱじめやがった。ムフフっ、そんなに紫さんがセックスしてもらってるのが羨ましいのかぁ、なるほどね、フェラチオの最中にオナニーしちゃうくらい羨ましいのかぁ。ツアーもう我慢ならん、ハメるぞハメまくるぞブチ犯してやるぞ

オラっとっとと足開くんだよ！」
「あぁっ、あっ！」
口から急にペニスが引き抜かれ、最後に最後まで吸い付いていた唇がぢゅぽんと空気の抜ける音を立てる。別れの寂しさを味わう暇すらなく、乱暴に押し倒された。後頭部が床にぶつかる。畳でなく板張りだったら、いい音がしていたことだろう。
太腿をがっしり掴まれ、脚を開かれる。膣口、神聖なる場所への入り口に、汚らわしいモノの先端が押し当てられる。
セックスされる。もう、逃げられない。その事実は、幽々子に感涙すらしそうなほどの高ぶりを覚えさせる。
「はぁーまったくこの幻想郷とかいうとこのマンコどもはどいつもこいつもドのつく淫乱だな、ムフフフ、ほぉら西行寺さん、今からチンポねじ込んであげるよー、嬉しい？」
「あはっ、嬉しいわ、ねぇ、早くそれ挿れて、私のことも紫みたいにしてぇっ」
「言われなくてもお前は今から肉便器確定だっつうんだこの馬鹿女っ、おらっ、挿れるぞ、挿れるぞ、挿れるぞ、挿れるぞッ」
「よぉしおら便女っ、こっちも挿れるぞ、イカせ殺してやる、いくぞ、いくぞ」
「あぁぁっ、くるぅ、デカチンポやっとくる、幽々子の目の前でぶちこまれちゃうぅぅう」

ぐ、ぐぐ、と、押し当てられたペニスがわずかに前に出る。二人の狭く濡れた肉穴に、亀頭がほんの少し、ほんの少しだけ入る。ゆっくりと挿れるつもりなのだろうか？ ――そんなはずがないと、幽々子は理解していた。こんな男達が、そんな紫のコレクション達のような真似をするはずがない。

「オラァ！」

「ソォラッ！」

「はっひ、アァァァぁぁあああっ！」

「はひっ、あはぁぁぁぁあぁぁあんっ！」

男どもの聞き苦しい掛け声が同時に響き、どちゅんっ！ と、泥の中に杭を打ち立てたときのような音が続く。一瞬遅れて、女二人の艶やかな嬌声が美しい和音を奏でた。二人は目を見開き、背筋をそらせ、己の体に走った快楽を表す。

男達は一斉に腰を突き出し、その凶悪なる肉の槍を、一撃で根元まで突き込んでいた。

「おおっ、ひぃいっ、あへっ、おっ、おぉ、ぉほぉっ」

幽々子の身体は、ガクガクと痙攣していた。権田原と繋がったところから、ぶしぃっ、ぷしぃっとはしたない汁が噴き出し、布団のみならず床までも濡らしていく。身体の内側が押し広げられているのを、これ以上ないほどありありと感じていた。みっちりと、肉

棒が穴を埋めている。やはり、今まで相手してきた男とは全く違っていた。女を堕落させるエキスが染み出しているかのように感じた。それは彼女の膣、子宮、そして脳を汚染し、己の思うがままに股を開き快楽をねだる惨めな雌犬に作り替えんとする。抵抗しなくてはめちゃくちゃにされてしまうが、できない。こんなふうに仰向けで両脚を大きく開かされ、根元までペニスを深々と差し込まれてしまっては、もうそういう存在になり果ててしまう以外の選択肢などあるはずないではないか。なにより、他ならぬ自分が、そうなりたいと思っているというのに。

「オッ、……ほぉおおおー……、こりゃあ、ヤッベェ、ネットリ絡みついてくる上に襞がムッチリと締め付けてきて、ムっふフゥッ、すンばらしい名器だねぇ、紫さんに勝るとも劣らぬドスケベマンコだ、これは一級品のザーメンタンクの素質があるよぉ」

ムフゥウウンと、権田原のついたすさまじい鼻息が、こちらの顔に浴びせかけられる。ぬるぬるとした腹肉、胸肉が、こちらの身体に覆いかぶさってきている。普通ならば嫌悪するところだが、そうはならなかった。普通ならば見るのも嫌なほど醜い男にこのようにヨガらされて手も足も出ず、あげく肉便器にするなどと宣言されている——その事実は、彼女をさらに高ぶらせるばかりだ。

「そらっピストンの時間だ、イけっオラッアクメしろっイけっ死ねっイけっ」

「ヒィーっ！　ホォアッオォアッ、あひっ、ひぃ、ひぃっ、あぁーッ」

そのでっぷりとした肉体が蠢き、全体重の乗った抽送がぶつけられ始める。どちゅっ、ぶちゅっと、濡れた肉を割り開く耳につく音が、一定のリズムに合わせ繰り返されていく。膣穴の奥の奥、子をなすためにある神聖な場所への入り口、子宮口を、亀頭が幾度となくノックする。いや、ノックなどという言葉で表せるほど生やさしい行為ではない。例えるなら、閉ざされた城門に破城槌が何度も叩きつけられるような、そういう情け容赦のないものだった。権田原のこぼした死ねという一言が、言葉の綾でなく本気のものであるように思えた。

「っひ！っひ！　アオッ、ッはぁぁあっ、あーっ、アァァァッ、おっおおっ、これっ、これぇぇっ、やっば、ヤバッ、デカッ、んひいぃぃ！」

「ムフフフフフいやらしい声だねぇ！　そんなにチンポが好きなのかなぁ？　ならもっと突きまくってやるよ覚悟しろよこの淫乱女！」

そして容赦なく貫かれるたび、快楽の電撃がペニスのいきおいをそのままに、膣穴から子宮、背骨を通り、脳みそを直撃しながら突き抜ける。それは彼女の知らない感覚だった。

そして理解した。これこそがセックスの快感なのだと。今まで自分が性交だと思っていたものは、おままごとか何かだったのだと。

「あへぇっ、ひぃいっ、あっあっ、ほぉおおっ」

何人もの男を相手しながらにして、彼女はようやく、セックスというものを知ったのだ。そしてそれは、他にないくらい、素晴らしいものだった。欲求不満など、抱くはずがない。これほどの快楽を前にして満たされていないなど、贅沢すぎてバチが当たるというものだ。

「ほれ紫さん、お友達は我々とのセックスを気に入ってくれたようですぞ、一安心というものですな、まぁそれはそれとしてもっとマンコ締めろってえの、お前の仕事はなんだよ言ってみろオラッ」

「あひぃっ！　はひぃぁっ、はっあ、あっあっあっ、便女、便女です、ザーメンタンクのおチンポしごき穴あぁぁあっ」

「『淫乱変態ドスケベ』が抜けとりますぞ、賢者とか言っておきながら鳥頭なんですかな、まったくどうしようもねぇ女だなチンポ以外のことマトモに覚えてらんねぇって人として終わりすぎだろ、まぁなんか人じゃねぇらしいけどどうでもいいや、それより今は、このドスケベ馬鹿マンコに、チンポのありがたみを死ぬほど教え込んでやることだよなぁ！」

「はぁひぃいいいっ！　教えてぇっ、チンポのありがたみ教えてぇえっ！」

紫の乱れる声が、その肉体の貪られる水音が聞こえてくる。彼女の秘められるべき場所には、自分と同様に中年男のペニスがねじ込まれ、ずごずごと激しい抽送が行われている。

何度も何度も何度も何度も、親の仇に包丁を突き立てるときのように、執拗に、容赦なく、徹底的に、八雲紫という女に、肉棒の味を刷り込んでいるのだ。例えば一人寝の夜、ふとそれが与えてくる快楽を思い出しては自慰行為にふける、そんな状態に仕立てあげようというのだ。そうなればもう、首輪をはめたも同然だからだ。首輪にかけられた手綱を握るのは、もちろんペニス――ひいては、その所有者である早乙女だ。

それがつまり、ペニスのありがたみを教えるということだ。教えるとはいうが、呪いをかけているといっても過言ではない。親友がそんなことをされている――かつ、今までに何度もされてきたのは想像にかたくないにもかかわらず、幽々子は抱いて当然の怒りを、抱かなかった。自分にも、ペニスのありがたみを教えてほしい――そんなことすら考えてしまう有様だった。

彼女にとっては幸いなことに、その機会は、今まさに与えられている最中だった。

「ンフフフあっちに負けないくらいこっちも盛り上がろうかあ、マンコが僕のチンポの形完全に覚えるまでズボりまくってあげるよムフフッ、そうなったらもうお前このチンポ以外で一生イけねえぞ、覚悟しろよ二十四時間三百六十五日オールウェイズコバコしてやるからなマンコの乾く暇があると思うなよ」

「ンンァーッ！　はっひ、あっひ、んほぉっ、おぉう！　アーッ、あっアッ」

権田原の言っていることがどれだけ受け入れがたいものであるかは理解している。だが、どうにもならない。頭に響く強烈な快楽が、こいつに従っておけ、従うと幸せになれるぞ、いいから従っとけってんだよオラッと、命令してくる。

「んだお前サルみてえに喚きやがって、チンポにハマりすぎだろまあ実際はハメられてんだけどな、イヒヒヒ！」

ぬっぢゅ、ぬっぢゅと、淫らを極めたような音をたてながら、ペニスは肉壺をひたすら掻き回し、耕していく。経験豊富を気取りながらにしてその実セックスのなんたるかすら全く知らなかったどうしようもない穴が、たくましい男を悦んで受け入れ奉仕する雌穴へ生まれ変わっていく。幽々子は涙をこぼしていた。悲しいのでも、恐ろしいのでもなく、ただ嬉しかった。ようやく自分は女としてのあるべき姿をつかみ、その一歩を踏み出そうとしているのだ。嬉しくなかったら、嘘というものだ。

「ンフフッ、そろそろ射精そうだなぁ、どこに出してほしいかいってごらんよ西行寺さん、そこにぶちまけてあげるよ、ぷりっぷりのドロッドロの、くっさいくっさい濃厚おっさんザーメン、もちろん膣内だろ膣内射精以外あり得ねぇよなぁお前みたいな変態腐れマンコがよぉ、おら早く言えよ膣内射精してくださいってよ、淫乱変態雌豚女の私におザーメンお恵みくださいってちゃんと言えたら膣内射精してやらなくもないぞ早く言えよオラッ」

膣内射精――性行為の終点にして、頂点。今そんなものを受けてしまえばどうなるか、わからないほど彼女は愚かではない。この身は、この精神は、だくだくと注がれる白濁のもたらすだろう強烈な快楽に、あっという間に、完膚なきまでに屈服してしまうだろう。そして自分は、彼らが求めればいつでも股を開いて性交を請う、惨めでふしだらな淫乱女に成り果てるのだ。

この、西行寺幽々子が。

「あはッ――」

普通なら、受け入れられない。だが、今の彼女は、受け入れられないものを望むようになっていた。悟ったのだ。汚い中年親父の、えげつないペニスによる、屈辱的なセックス。とうてい受け入れられないものこそが、自分を真に悦ばしてくれるのだと。

だから、彼女は、言う。

「あはぁぁあっ、膣内射精お願いします、淫乱変態雌豚女の私にぃっ、どうかザーメンをお恵みくださいぃっ、このドスケベ亡霊マンコの中にくっさいくっさい精子ぶちまけて、子宮の中まで濃厚ザーメンマーキングお願いしますぅううっ！」

「ングフフフフフフフ！　よく言えましたぁ花丸ですぅ！　よぉしじゃぁ極上美人の性欲もてあました欲求不満マンコ膣内射精してあげよう、ちょっと待ってろすぐ死ぬほど

種付けしてやるからよぉ、うおぉっ、オオォオオオォッ」
「あぁぁぁぁあっ！　ほぉっ、おひっ、ひぃ、ひぃ、あぁぁあっ、ンアァァアッ！」
ピストンがいっそう激しくなる。元から容赦など存在していなかったが、それがさらに速まっていき、さながら幽々子という肉布団に何度もダイブするような、全体重をかけたものになっていく。
叩きつけられているのは、まさに圧倒的快楽だ。しかし、幽々子は自ら腰を振り、尻を淫らにくねらせ、なおも貪欲に快楽を求める。当然だ。これ以上が存在していて、しかも与えられるのがわかっているのだから、どうして求めずにいられようか？
「ややや、あちらもそろそろですかな、ちょうどよかった、実は私もそろそろでしてな」
「あはぁぁ射精してぇ、八雲紫の雌豚腐れ便女マンコにぶちまけてっ、精液、ザーメンっ、はやくっ、ぶちまけてぇぇえっ」
「おやおやァ？　まだ何も言っていないというのに自分からそんな言葉が出てくるとは、紫さんもようっやく便女としての自覚が出てきたということですかな？　まったく見下げ果てた奴だなえぇ？　それともあれか、教育の成果が出てきたってか、そうだよなァ散々チンポぶち込んで自分の立場ってモンを教え込みまくってやったもんなぁ!?」
「はひぃ、感謝してます、その節は本当にありがとうございましぉあああっ！　あひっ、

イっク、アァァァヒッ、アアアアッ！」
「ははははちゃんとお礼が言えるあたりはさすがに妖怪の賢者様ですなぁ！　よぉおおし、ちゃんとお礼が言えて偉いからご褒美に膣内射精してやるぞっ、オオオっ、射精す射精る射精る射精す射精る射精るゥウウッ」
男二人の喚き声、肉と肉とがばつんばつんとぶつかる音、ねっとりとした汁をかき回す猥雑な音に、美女二人の狂ったような嬌声。それらは、この広大な白玉楼の隅から隅まで響き渡ろうかというほどだった。
その光景は、端から見れば異様だったろう。美しき肉体が醜い肉塊によって押し潰されながら、穢らわしい欲の棒でもって、陵辱という言葉すらぬるく思える勢いでもって陵辱されている。女はそれを嫌がるどころか、男と舌を絡め唾液を交換し、放埒きわまる乳房をぶるんぶるんと揺らし、腰をくねらせ、すらりとした脚を彼らの腰に絡めまでして快楽をねだっている。彼女らには――それどころか、どんな女も全く似つかわしくない、考え得る限りおよそ最低であろう相手にだ。今の彼女らにとっては、それこそが悦びだった。
「オオッ、オオオオオオッ、ヌゥウウウゥゥウウウウウウっ！」
「よし射精すぞ射精すぞあー射精る射精る射精る射精る射精る射精る射精る、アアッ！」
「はひっ――んんっは、かはっ、ァあああぁああッ！」

「あくぅっ、ひはっ、アッは、あぁぁあああああーッ！」

そして、男どもがクライマックスを迎える。各々の獲物に真上から腰を叩きつけるようにし、深々と逸物を差し込む。さながら、モズのはやにえのように。鈴口が子宮口に狙いを定め、絶対に逃がさない状態になったと同時に、それは始まった。

己のやんごとなき場所にねじ込まれたありがたき異物が、体積を増す。来る。幽々子が直感を抱き、押し寄せるだろう圧倒的快楽への覚悟を決める前に、それは訪れた。

胎内を押し広げる硬き肉の棒が、信じられないことにさらに膨らむ。次の瞬間、灼熱が胎内に迸る。それは奥の奥、小さな小部屋への入り口をあっさりと通り抜け、その内側にまで入り込んでいく。

「アァァアああッ、ひぃいいいっ、あつぃいいいっ、せいえきっ、ザーメン熱いのぉっ、ひぉおおぅ、ひーぃっ、アォッ、オオオォオッ」

膣穴が、子宮が、灼けているかのように感じた。放たれる欲望は、そういう錯覚を抱くほどに熱く、鮮烈なものだった。まるで溶岩か何かだ。ごびゅり、ぼびゅりと、なんらの容赦もなしにスペルマが放たれては、肉穴に流れ込んでいく。

その射精は、今までに受けてきたのとは比べものにならなかった。これこそが、本当の射精なのだ。今までのは、子供の幼稚なお遊びに過ぎなかった——そう気づかせてくれる

ようなものだった。何千何万何億、文字通り数え切れない精子の存在が感じられる。卵子と結合して愛の結晶になるのだという目的を抱いた、普通の精子ではない。この女に膣内射精の快楽を教え込んでやるのだ、教え込んで、それなしでは生きてゆかれぬようにして、一匹の肉奴隷に仕立て上げるのだ——そんな下衆な考えを隠そうともせず、またそういう目的を達するだけのちからづよさを兼ね備えた、まさに女を堕落させるための精子だ。熱いのも当然というものだった。それは、この女を堕とすのだという情熱の熱さだ。

無数の精子は、玉袋という牢獄から解き放たれた解放感に酔いしれ、うぞうぞうぞうぞと蠢きながら、幽々子の膣穴を、子宮を染め上げていく。秘めやかな肉を形成する細胞の一つ一つにまで、己の痕跡を残していく。彼女の秘肉は、不可逆的な変化を経験させられながらにして、なおも悦んでいた。それはある種、女の本能とでも呼ぶべき者だった。雄——自分を犯し、種をつけてくれるもの——として優秀な者が相手なら、何をされようと嬉しく感じてしまうものなのだ。……紫のコレクションも、まあ優秀ではあった。社会的に広く認知された、男という存在としては。しかし、今の幽々子にとって、そんなものは何の価値にもならない。満たされていなかった欲望を満たしてくれるのは、彼らではなく、権田原や早乙女だ。

「あぁぁっぁあああッ、へひぃいいっ、あっは、オッオッオッ、ひぃいい、あはぁあ」

だから幽々子は、ほとんど陵辱に近いセックスで、人としてはこれ以下などあり得ないような輩に、半ば強制的に女として最も大切な場所を白く汚されながらにして、法悦の声をまき散らして絶頂していたのだ。

どびゅるごびゅると、まだまだ射精は続いている。ぎとぎととした外見から想像できる通りの、こってりとしたスペルマが――いや、想像通りではない。想像以上に、こってりとしている。その粘りけたるや、糊や餅のようであった。熱々の餅が喉に張り付いたときの厄介さは言うまでもないことだろうが、彼女はそれを、膣で、子宮で受けていた。煮えたぎる精液の、女を一瞬で魅了し虜にしてしまえる類の熱さを、延々と味わわされていた。

「オォーッ、まだ射精るまだ射精るまだ射精るウウウウッ」

「アはぁあーッ、オッオッオッ、オゥオッ、おおっひぃ、ほぉおおおおっ」

幽々子を肉の布団であるかのようにし、権田原は全体重をかけて腰を押しつけてくる。子宮を押し潰そうとしているかのようですらあった。逃れようとしたところで、こうまで串刺しにされていては絶対に逃げられまい。もっとも、そもそも逃げようなどと思ってもいなかった。その証拠に、権田原の背中と腰には、彼女の腕と脚が絡みついていた。絶対に離さないとでも言わんばかりだ。

考えてしていることではなかった。ただただ、快楽を、屈服することを求める本能が、

そのような行動をとらせていた。

「あーあああああ射精る射精る射精る射精るッ、まだまだ射精ますぞォ紫さん、まったくこのスケベマンコときたらなんちゅう搾り取り具合だ本当にコレおおおぉおッ、ザーメンタンクになるために生まれてきたようなマンコしやがってキンタマの中身全部持って行くつもりか差し押さえかよッ、ならお望み通り射精してやるッ、オオオッ、射精る射精るッ、めっちゃ射精るッ、めっちゃ射精るッ、射精ますぞォオオオオオオオオーウッ」

「あーッ、ああああッ、ほぉおおお、スゴッ、ヤバッ、あぉっ、アヒッ、いぁッ、おホッ、ほひぃいいっ、はっへぇぇえええっ」

そしてそれは、紫も同じであるようだった。ここからでは早乙女の肉が邪魔で見えないが、その下から聞こえてくる声が、紫の絶頂っぷりを端的に示していた。幽々子の胸に、これ以上ない喜びが去来する。親友と最高の時間を共有する。これほど素晴らしいことが、いくら世界広しといえどそうそう転がっているだろうか？

ゆえに幽々子は、暑苦しくむさ苦しく汗臭い肉の布団に押し潰され、これ以上ないほど惨めな射精を受けているというのに、幸せに包まれていた。気持ちよくて、しかも幸せである。ここはさながら、天国のようだった。

「ッオオオオッ……っはぁ、射精した射精した。金玉ン中身全部持ってくつもりかよこの、

なんてぇ女だよ全く。ムフフ、よかったよぉ、西行寺さん」

「はひぃ、っ、はぁっ、ひぃ、ひぃ、はぁーっ、はぁ、はぁ、っ、ふひぃ」

この時間が永遠に続いてくれたなら、どんなに幸せか――しかし残念なことに、そうはいかないのだ。どんなに素晴らしいものごとも、いずれ終わりがくる。それは、セックスにしても同じこと。ひどく長い絶頂も、いつまでもは続かない。膣内で暴れ、好き放題に種付けしていた肉棒も、次第にその脈動の勢いを失って、とうとう鎮静化した。

もっとも、沈静化したとは言え、それは脈動に限っての話だ。魔羅は変わらず猛々しい姿を保ち、いつでも、何なら今すぐにでもまた幽々子を犯すことのできる状態にあった。

一方の幽々子も幽々子で、鎮まりなどしていなかった。当然のことだ。ひどく粘っこく熱い白濁が腹の中にたっぷり詰め込まれている。その熱が、堪えがたいほど甘美な余韻を与えてくる。子宮の中にたっぷり注ぎ込まれた熱さが伝導し、全身を侵していく。

「はぁあん、あぁっ、はぁ、あぁぁん」

ゆえに彼女は、抽送などとっくに終わり、特にどこかを愛撫されているわけでもないというのに、甘いため息をこぼしながら快楽に悶え、その身をくねらせていた。

紫は、素晴らしい人たちを紹介してくれた。こんなに素晴らしい気分になったことは、一度だってない。どんな美男子に抱かれても満たされなかった部分が、充ち満ちていた。

「ふっひぃー……ムフフッ、いやぁ、えげつないくらい射精た。いやぁ、すごいねぇー、西行寺さん。君、まさに名器だよぉ。とんでもないエロマン女だ。ハメられるための穴っていうのは、こういうののことを言うんだよねぇ。いやはや、チンポ吸い尽くされるかと思ったよ」

権田原は、体重を半ばこちらへ預けてきていた。みっちりと密着してくる、汗まみれの中年男の腹肉布団だ。本来ならたいそう不快なことだろう。だが、屈服しきった今の彼女は、むしろ安心感を覚えていた。中年男の肉に包まれることにだ。

「いやはや、まったく紫さんの膣穴は、いつヌいても最高ですな。我々がたっぷり躾けてさしあげた甲斐あって、大した淫乱ドスケベ便女マンコに育ちましたなぁ？」

「あはぁっ、はひぃ、ひぃ、ありがとう、光栄だわぁ」

紫の方も、似たような状態であるようだった。おほ、ひぃ、ひぃと、嬌声にも似た荒い息遣いが聞こえてきた。胎の中に注がれたものの与えてくる官能が、余韻を覚まさせないのだろう。ちょうど、自分がそうであるように。

「はー、よっこいせっ、……ムフッ！　ぢゅるんっていったよぢゅるんって。漫画の中の話だと思ってたよ、マンコがチンポと離れたがらなくて、最後の最後まで吸い付いて、音たてちゃうなんてさぁ、ムフッ、漫画のキャラよりエロいとか、もうとんでもないね」

権田原はようやく起き上がった。汗臭さと重たさから解放されたというのに、幽々子は物足りなさのようなものを覚える。

彼の言うとおり、ペニスが引き抜かれるその瞬間、ヴァギナは空気が抜けるような音を立てた。それはつまり、幽々子の肉穴が、ペニスを入れられている方が自然であるような猥穴につくりかえられたことを意味する。たった一度のセックスで、だ。

「あはぁんっ……」

「おおっと、ムフフフ、もったいないなぁ、油断しちゃだめだよ」

力なく放り出された両脚の間、埋めてくれるものを失い、寂しげにひくひくと収縮している淫膣から、白いモノがどろりとこぼれる。彼女が権田原のセックスの前に屈したのだという、何よりの証拠が、だ。

「さてさて、西行寺さん。あなたのお友達の汁で汚れてしまった私のペニスです。舐めて清めてくださいますかな？」

「おっ、それなら僕は紫さんにお掃除してもらおう。ムッフフフフ！　ほらほら紫さん、西行寺さんドレッシングぞえのチンポだよー」

「あはぁっ……む、ぢゅるっ、んぐぷっ」

「はむっ、んぢゅぷっ、ぢゅるるるっ」

眼前に、ペニスが突き出される。起き上がってこちらまでやって来た、早乙女のモノだ。ぬらぬらと輝いているのは、つい先ほどまで、紫の濡れた肉穴を犯していたからだ。ただでさえ魅力的なモノが、より魅力的になっている――咥え込まずにはいられなかった。

口腔の内に、複雑な味が広がる。ただの男の味に、何か加わっている。それがつまり、紫の味であるに違いなかった。二つが合わさって生まれるセックスの味は、幽々子を魅了し、あっという間に口淫に夢中にさせる。

「ときに西行寺さん。我々がこの幻想郷とやらの外の人間であることはご存じですかな」

頷いた。彼らの言葉の端々から、なんとなく分かっていた。例えば権田原の言った台詞、――幻想郷は美人さんの里なんだねぇ――など、外の人間でなくては出てくるまい。

そういうことを言おうとする幽々子を、早乙女は手で押しとどめる。

「あぁ、チンポしゃぶりをしたままで結構。聞いていただくだけで十分です。女性の仕事であるチンポしゃぶりの邪魔をするほどの話でもありませんから。……でまあ、ともかく、我々は外の世界の人間なのです。ちょうど一ヶ月ほど前でしたか、紫さんと知り合って、幻想郷のことを教えてもらった次第でしてねぇ」

「んぢゅる、ぐぷっ、ふむぅ」

「まあね、我々こんな姿ですから、最初は警戒されましたとも。しかし、我々の根気強い

説得によって、今はこんなにも従順になった、ほら、ご覧なさいよ、あのさまを」
「ンッフゥ、いいよ紫さん、ほらもっと舌使えっつうの何回言っても覚えねぇなお前は」
早乙女の指さした先では、紫が権田原の下腹に顔を埋め、ぐぽぐぽと音を立てその一物をしゃぶり立てていた。その姿は確かに、幽々子の知る八雲紫とは別物だ。
「我々、女性を便女として教育してさし上げる仕事をしておりましてな。その一環として、紫さんにも便女として生きることの素晴らしさを教えてさし上げたのです」
平然と語っているが、その実、言っていることはとんでもないことだ。つまるところ、この男達は女を性奴隷にするのを生業としていて、紫はその毒牙にかけられたのだ。
「今回こうして幻想郷に来たのも、幻想郷の方に便女としての教育を施すためでしてね。西行寺さんのことは、紫さんからうかがったんですよ。お礼としてセックスしてやるから、便女として生きる素晴らしさを理解していただけるような女性を教えろと聞いたところ、あなたの名前が出た。それで今日、こうしてお邪魔した次第でしてな」
早乙女はそれで話を締めくくった。
考えるまでもないことだが、こいつらは危険だ。女に便女としての生き方を教えるなど、正気で言えることではないし、まともなことでもない。幻想郷の女を皆性奴隷に堕とすと、そう言っているのと同じことだからだ。

そういうふざけた輩は、本来なら紫が弾いている。しかしながら今回は、その紫が機能していない。彼女は堕ちた。元々紫は、程度の問題こそあれ、自分と似た悩みを抱えていた。それを解消するため、ほんのちょっとした火遊び程度の感覚で、彼らとの行為に手を出したのだろう。

結果は、ご覧の通りだ。彼女は彼らとの行為にハマッてしまったのだ。知り合ったのが、一ヶ月前と言ったか――つまり、一ヶ月もの間、彼らとセックス漬けだったのだ。わずか一回でもこうまで屈服してしまえるようなセックスを、一ヶ月の間、ずっと。それはもう、誰であろうと堕ちてしまって当然というものだった。

そうして頭を潰したところで、こいつらは本格的に動き出した――それでも調子に乗りはせず、確実に、頭から近いところから堕としにかかった。その「頭から近いところ」が、すなわち、自分なのだ。

自分はつまり、紫に売られた。セックスを対価として。今の紫にとっては、友人より、幻想郷より、セックスの方が重たいのだ。それだけ紫が彼らの前に屈してしまっているということの現れだろう。

幻想郷のためにも、友人の、そして自らのためにも、こいつらはここで始末するべきだ。

「さて、いかがですかな、西行寺さん？　便女としての生き方というのも中々悪くないと、

受講生からは好評ですぞ。我々の教育を受けてみませんか？」
「んぐ、ぢゅる」
始末するのは簡単だ。咥えたこのペニスを噛み千切ってやれば、それで終わりだろう。
「ぷは……。そうね、じゃあ、お願いしようかしら。一ヶ月の間たっぷり教育して、私のことも、紫みたいにしてちょうだい」
だが、幽々子はそうしない。それどころか、彼らのふざけた提案を、受け入れてみせた。
こいつらが危険？　自分は売られた？　そんなことは正直、どうでもよかった。彼らは、自分が日頃抱いていたどうしようもない不満を、綺麗さっぱり吹き飛ばしてくれる。それだけが重要なことだった。彼らとのセックスは、気持ちよいのだ。
既に手遅れだったのだ。権田原との性交により、幽々子はとっくに、屈服してしまっていたのだから。便女としての教育をしてもらえるだなんて、最高だ。さっきのような最高のセックスを、少なくとも一ヶ月間、たっぷりとしてもらえるということなのだから。
隙間から半身をうかがわせた紫の、あの乱れ具合。あれを羨ましいと感じてしまえる者が、彼らに逆らえるはずなど、なかった。
「ふふふふ！　そう言って下さると信じておりましたぞ、いやはやまったく幻想郷の女というのはどれもこれもチョロくて助かりますなぁ！　……よしじゃあさっさと股開けこの

マンコ女が。これからしばらく俺らの種付けセックスマンコ奴隷だぞ、徹底的に調教してやるから覚悟しろやオラッ」
「あはっ、よろしくお願いしますぅ」
「ンフフフ紫さん、よかったねぇ、幽々子さんに便女生活の良さが分かってもらえたねぇ。そら、ご褒美の種付けセックスしてやるからとっととこっちにケツ向けろオラッ」
「あは、きて、早く来て、ご褒美の種付けしてぇ」
四つん這いになって尻を突き出すと、今度は早乙女のモノが、淫裂に押し当てられるのを感じた。熱く、硬く、どこまでも逞しい、まさに男と言ったところのペニスが。
横で同じく獣の姿勢をとった紫と、目が合う。彼女はまさに雌そのものといった表情を浮かべていた。……自分もそうであるに違いなかった。
「そぉら、西行寺さんのマンコの具合も見てさし上げますぞッ、おら入るぞ雌豚オラ！」
「ンッフッフ、じゃあマンコの味比べといこうかぁ、そらイけこの肉便器がッ！」
「あはっ、あぁぁあああああああッ！」
「んひぃぉっ、ほぉおおおおおっ！」
そしてまた、根元まで深々と肉棒が差し込まれる。部屋に、四種の喚き声が響き渡る。
これからしばらく、実に楽しくなりそうだ。